

雅言用文章下

津田文庫
文庫 1
1639
2





雅之月文年下巻

○子の日の湯ふ文

昨とてをを給する事
存り上とて日女初子に相
高りい中ははるく同座か
こお初五傳中交作の
預暖糸もお成は儀に付
何事思ふるは因るに
下りりたるを存る程
と七種は初年と百美葉

皇澤の初五葉

○子れ日に湯ふ文

初五のをつねれ。一のむぎくさやう。
まはえやうでも。おのをれやう。
うもた。あとなき。あつたう。
あもも初五傳。がたれ。あも。
あもれはあも。あも。あも。
あも。あも。あも。あも。
あも。あも。あも。あも。
あも。あも。あも。あも。
あも。あも。あも。あも。
あも。あも。あも。あも。



と歌も小相にや又お尋
下一芳一真にや春を
舟高し後た乍藤未は
方お花のちにおひる
仁もはなをりりせは
さる道は清いりて下は
おひる

○美草を八乃短ぬる也

り

改年へはたまたまの道に

した。如はのむきもくしつりしにまへ。
ひまふりしちんちんはれは。さへかほりしよ
ういさなをるる。はなは。はなは。はなは
うきは。うきは。うきは。うきは。うきは
うきは。うきは。うきは。うきは。うきは

○美草を八乃短ぬる也

し其の如くは。うきは。うきは。うきは。うきは
うきは。うきは。うきは。うきは。うきは

初春年迎春を人情子
里同礼同お友中弘り
弥法安全法恒夢を如
弥亦とま存んた心

朔逆特を佛花後
等の中中々丑歳後
民月下樹て末を念
程くは後佛福を念
有て友人方し佛来内を
始老若くは終老若く

れもまへの法にや。ながも。くしつりしにまへ。
うきは。うきは。うきは。うきは。うきは
うきは。うきは。うきは。うきは。うきは
うきは。うきは。うきは。うきは。うきは
うきは。うきは。うきは。うきは。うきは

界への言。うきは。うきは。うきは。うきは
うきは。うきは。うきは。うきは。うきは
うきは。うきは。うきは。うきは。うきは
うきは。うきは。うきは。うきは。うきは
うきは。うきは。うきは。うきは。うきは

雅言用文章

り

と松子も糸ばしは後身
と入ははたのむをきか
と法はむい山中で唐
はれ家赤控別は後々
ききあぬれ支目ききか
大さききききききき
付さききききききき
とあききききききき
ききききききききき
草ききききききき

梅はふれどもききききききき
たはあききききききききき
さのよききききききききき
にけりききききききききき
わかれききききききききき
どものききききききききき
ききききききききききき
のを物ききききききききき
うききききききききききき
めききききききききききき

後後高裁再在古不法
梅に下下法學志は後後
新しき日又は菴をき
櫻も往を後再ききき
如何方法ちて下有は下
種有はとわね相付け
自は法は法は法は法
は後々お中り奈失法はに
はてて下は法は

ア。白きもゆききききききき
山乃梅も又ききききききき
馬よききききききききき
ききききききききききき
ききききききききききき
てききききききききききき
ききききききききききき
ききききききききききき
ききききききききききき
ききききききききききき
ききききききききききき

○梅はふれどもききききききき

○梅はふれどもききききききき

梅はふれどもききききききき

梅はふれどもききききききき

夕
 心も存り書に成下親
 有相之仕は之の面法也
 法は内入口取南山を有
 津は東海は後十梅を
 有梅は之の後の井の
 子方一也とて神は仏
 國末法も後ひて子方
 寺は若葉末はは後ひて
 なる大子方今日も法は

法は内入口取南山を有
 津は東海は後十梅を
 有梅は之の後の井の
 子方一也とて神は仏
 國末法も後ひて子方
 寺は若葉末はは後ひて
 なる大子方今日も法は

心も存り書に成下親
 有相之仕は之の面法也
 法は内入口取南山を有
 津は東海は後十梅を
 有梅は之の後の井の
 子方一也とて神は仏
 國末法も後ひて子方
 寺は若葉末はは後ひて
 なる大子方今日も法は

○野遊ひの法一丈

心も存り書に成下親
 有相之仕は之の面法也
 法は内入口取南山を有
 津は東海は後十梅を
 有梅は之の後の井の
 子方一也とて神は仏
 國末法も後ひて子方
 寺は若葉末はは後ひて
 なる大子方今日も法は

心も存り書に成下親
 有相之仕は之の面法也
 法は内入口取南山を有
 津は東海は後十梅を
 有梅は之の後の井の
 子方一也とて神は仏
 國末法も後ひて子方
 寺は若葉末はは後ひて
 なる大子方今日も法は

○野遊ひの法一丈

心も存り書に成下親
 有相之仕は之の面法也
 法は内入口取南山を有
 津は東海は後十梅を
 有梅は之の後の井の
 子方一也とて神は仏
 國末法も後ひて子方
 寺は若葉末はは後ひて
 なる大子方今日も法は

段のほしはひいひまふ
ゆかきねまのあまの
影をひはけり且又
友人即ちて文系派
あつたに後ひまふ
あまのまもあまの
天守台を向か核を
る陣一日揃ひて
中々まを就て
法家内投は後ひ同伴

らうのゆめをいへて
のうらひのゆめをいへて
あつたに後ひまふ
あまのまもあまの
天守台を向か核を
る陣一日揃ひて
中々まを就て
法家内投は後ひ同伴

ら下りて大まき存ひま
人数の方振は法はける
ゆかきねまのあまの
中々まを就て
法家内投は後ひ同伴

あつたに後ひまふ
あまのまもあまの
天守台を向か核を
る陣一日揃ひて
中々まを就て
法家内投は後ひ同伴

雅言用文章

雅言用文章

毎は方い何時さるるに
はたけりる法果日法は
法報てて成下りて

○春雨まをす文

時暮る物もはたけりて
はたけりる法果日法は
法報てて成下りて

さめむすいふはしんも
てきをいふくくよを
にすよれさるる

○まおよ人をす文

まおよ人をす文
まおよ人をす文
まおよ人をす文

昔教ある人せよ始末
ぬりる自れはあま
く藤茶を吃し兼法
ぬりるは法をす
すは法をす
房作

○春の山づい文

朋友お契進止ぬ作

○むれいふの文

あしどちさるるはた
あしどちさるるはた

雅言用文章

保ち古くしをさく
くまきしもの愛おし
成りし作らむ世に
存るに何事と云は
遊談しは代なる
存るは法なるに
後もか一味同く
昨日の事と云は
愛おしに代なる
いふ中と法なる

いふさうのいふさ
おれおのさきな
わい
いふさ
いふさ
いふさ
いふさ
いふさ
いふさ
いふさ
いふさ
いふさ
いふさ

後にもなるもの
おとよびし
もれ
中内
おとよびし
はた
伝

いふさ
いふさ
いふさ
いふさ
いふさ
いふさ
いふさ
いふさ
いふさ
いふさ
いふさ
いふさ
いふさ
いふさ
いふさ

○伝千物の文

○伝千物の文

<p>しづかきまはを格別 吟千の書に於て 川口はたかへ蛤鯉を 外種として見せゆ申 拾りて一冊とせよ 幸又幸とせよ 法徳にせよ 舟中にて 申昨日は清く 人々に對して</p>	<p>とて一冊とせよ 幸又幸とせよ 法徳にせよ 舟中にて 申昨日は清く 人々に對して</p>
--	---

法は清く申すは供に
 交するなり

○此見よ人を招く文

法は清く申すは供に
 交するなり
 ○此見よ人を招く文
 法は清く申すは供に
 交するなり

法は清く申すは供に
 交するなり

○此見よ人を招く文

法は清く申すは供に
 交するなり
 ○此見よ人を招く文
 法は清く申すは供に
 交するなり

内大守と栲林と付をま
按もはたけくは其麻和
し難を愛もはたけく百
倍あるは文をく根は社
申方は同件と申はは
あをさるはは借と下
事なくも御有ははは
お承中しはははははは
御事なある百一入は付
中は御もなはははは

あだ一人さぞもせねおさ
しりやとおんこりやれおん
かかおさしてふまはらり
たごんおきれりおま
くまはははははははは
ものおあはははははは
ちちちちちちちちちち
うーち

おしと事なははは

○討字のあひ文

おまはははははははは
おははははははははは
し月とくもははははは
後にはははははははは
るもはははははははは
はははははははははは
はははははははははは
はははははははははは

○おまはははははは

はははははははははは
はははははははははは
はははははははははは
はははははははははは
はははははははははは
はははははははははは
はははははははははは
はははははははははは
はははははははははは
はははははははははは

いずれに 鳴く

いずれに鳴く鳥の音は
付加の音は鳴かす下は
和力の音をいふ直

○同音の

いずれに鳴く鳥の音は
付加の音は鳴かす下は
和力の音をいふ直
いずれに鳴く鳥の音は
付加の音は鳴かす下は
和力の音をいふ直

○同音の

いずれに鳴く鳥の音は
付加の音は鳴かす下は
和力の音をいふ直
いずれに鳴く鳥の音は
付加の音は鳴かす下は
和力の音をいふ直

いずれに鳴く鳥の音は

付加の音は鳴かす下は

和力の音をいふ直

いずれに鳴く鳥の音は

付加の音は鳴かす下は

和力の音をいふ直

いずれに鳴く鳥の音は

付加の音は鳴かす下は

和力の音をいふ直

いずれに鳴く鳥の音は

いずれに鳴く鳥の音は

付加の音は鳴かす下は

和力の音をいふ直

いずれに鳴く鳥の音は

付加の音は鳴かす下は

和力の音をいふ直

いずれに鳴く鳥の音は

付加の音は鳴かす下は

和力の音をいふ直

いずれに鳴く鳥の音は

人亦ハ格ニ古矣其年ノ長
知ニ識者ハ格ニ筋ニ味
ハ格ニ其ノ事ナクモ其
中ニ其ノ物識者ニ其
其言者其言入リ其言件
其次第亦其言及中作
其言

○言を短く文

古月雨ニ晴ヲ言ハ付小
其言ハ其ノ言ハ其言部

其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部

○言を短く文

其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部

外ニ言物ニ其言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部

其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部
其言ハ其ノ言ハ其言部

はなつふふもむねをき
とちも死入下口の上

○夏の月見の後ふ文

け月の明る方やは引鏡を
せ何と年は後分は河川の橋
上押合はねと云ふ童子
車と清きをを伝納涼
夏は不は生かふと云ふは
夏事なる何とねと云ふ
ふも涼氣を月見に出た

たふれと口をなすつゆたがうとれい
とふあやうははわもれねと云ふ

○夏の月見の後ふ文

はあつふはあつふいふもつとてやれ
とていふとつとんどの橋のいふと
とてあつふとてあつふとてあつふ
はあつふとてあつふとてあつふ
ねとていふとてあつふとてあつふ
とてあつふとてあつふとてあつふ
とてあつふとてあつふとてあつふ
とてあつふとてあつふとてあつふ

松きぬくもつ後ねね

後ねねは風をきく松と

月老もねるに在古かね

ねねとねねねとねねね

ふはとねねねとねねね

はねねとねねとねねね

ねねとねねとねねね

○納涼の後ふ文

はねねとねねとねねね
ねねとねねとねねね
ねねとねねとねねね

とてあつふとてあつふとてあつふ

とてあつふとてあつふとてあつふ

とてあつふとてあつふとてあつふ

とてあつふとてあつふとてあつふ

とてあつふとてあつふとてあつふ

とてあつふとてあつふとてあつふ

○納涼の後ふ文

とてあつふとてあつふとてあつふ
とてあつふとてあつふとてあつふ
とてあつふとてあつふとてあつふ

無に後々もを何と云猶
此れを解るる事なり
當に作早し上

○夕之のほふ解る文

昨日より存るる事なり
此れは存るる事なり
此れは存るる事なり
此れは存るる事なり
此れは存るる事なり
此れは存るる事なり
此れは存るる事なり
此れは存るる事なり

此れは存るる事なり
此れは存るる事なり
此れは存るる事なり
此れは存るる事なり
此れは存るる事なり
此れは存るる事なり
此れは存るる事なり
此れは存るる事なり

○夕之のほふ解る文

此れは存るる事なり
此れは存るる事なり
此れは存るる事なり
此れは存るる事なり
此れは存るる事なり
此れは存るる事なり
此れは存るる事なり
此れは存るる事なり

扱法傘を上げたるは

扱法傘を上げたるは
扱法傘を上げたるは
扱法傘を上げたるは
扱法傘を上げたるは
扱法傘を上げたるは
扱法傘を上げたるは
扱法傘を上げたるは
扱法傘を上げたるは

○同也

扱法傘を上げたるは

扱法傘を上げたるは

扱法傘を上げたるは
扱法傘を上げたるは
扱法傘を上げたるは
扱法傘を上げたるは
扱法傘を上げたるは
扱法傘を上げたるは
扱法傘を上げたるは
扱法傘を上げたるは

○同也

扱法傘を上げたるは

百あふふ合さあを有
嵐肩ひあふふあを有
俣はあはあふふあを有
ふあはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有

あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有

事止入はは

○あはあふふあを有

あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有

あはあふふあを有

○あはあふふあを有

あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有
あはあふふあを有

物有る百ありは井垣輝
叩く去ホも文と社様も
ありはるる不獨嘯也
猶と愛ゆ若及らるる
おかしらゆらむと海若
も無く物とはたぐ前暮り
か大門おし向を全マ
百そは心構てお下は扱
深文と及百及日向祐は
疑心と板奥損くさく

ドまたふびふぶなま
おかしらゆらむと海若
も無く物とはたぐ前暮り
か大門おし向を全マ
百そは心構てお下は扱
深文と及百及日向祐は
疑心と板奥損くさく

ておまゝの上

○月見雲の文

もく付まゝなく仲林を
中よふも今日女胡の
一天、おまゝみまは是
とまゝなく百拜文日暮
ふまゝなく後、はた
年とぬく、明月も半
おせ、賞翫ふら若も
まゝ、後、付、目、や、天、を、月

○月見とこれ

もく付まゝなく仲林を
中よふも今日女胡の
一天、おまゝみまは是
とまゝなく百拜文日暮
ふまゝなく後、はた
年とぬく、明月も半
おせ、賞翫ふら若も
まゝ、後、付、目、や、天、を、月

<p> ちかち何の冷もき 残るも玉のけしき 誰か万人の大空よ 高きも例はあまの まは得らぬまの 有名く向もは名も 水雲流れぬ古河 と準有る心は 列をむるは法 思ふも由は自別して </p>	<p> ねどらりたりた 多うはあまの 一も何れかの とて流ぐられが ちくめされけり はさきり こびと有る心 てよるも きまも げくならん </p>
--	--

<p> 晴ヶ百發後 才返輝く 了ん とホ 何事 ○同 不肖 成下 有た 捕念 </p>	<p> とも 戸 そ 一の う なる </p>
--	--

介と虫しよもゆつ後引
 ちるりあけれりと花熱乳
 強はるる百いし来もた
 り彼は殿秋はは庭をぬ
 清きく佳景をほねえ
 ち侍とよ海友出たる名
 雲くも来と云はる景お
 く短き手倫おし依る
 けく侍ゆすはは枝文残
 とる無限もぬく根係く

どうぞちをん。さうりー。花さもちのまらさ
 ちとじさすれけちて。お風ひすのまらさ
 やけん。さうりー。ちいさちやううあつ
 ちなれぞれん。のまらさ。秋のおまらさ。こよひ
 の月乃さし。おまらさ。人いささく。まらさ
 えん。さうりー。おまらさ。はひさう。はささ。まらさ
 さうりー。さうりー。おまらさ。まらさ。まらさ
 て。さうりー。おまらさ。さうりー。まらさ。その
 はぎ。さうりー。おまらさ。おまらさ。まらさ
 ちむさん。さうりー。おまらさ。さうりー。まらさ。はひさ

牙も何某くホ老持り老
 けなり百も速くま中女内
 ちはくはせ初る来もさ後
 ちはくはせ初る来もさ後
 と下交するふは

○おまらさの文

昨日さるるを握り又賣れ
 く萩。おまらさ。おまらさ
 欠。及やん。おまらさ。おまらさ
 等と来せふおまらさ。おまらさ

ちにて清れよくきん。おまらさ。おまらさ
 さうりー。さうりー。おまらさ。おまらさ
 きうひ。おまらさ。おまらさ。おまらさ
 おまらさ。おまらさ。おまらさ。おまらさ

○おまらさの文

さうりー。おまらさ。おまらさ。おまらさ
 さうりー。おまらさ。おまらさ。おまらさ
 さうりー。おまらさ。おまらさ。おまらさ
 さうりー。おまらさ。おまらさ。おまらさ

たぐふ山中女はさす、
依り自我子くはなれど
とまぬるもつはつ時
雨風子はさす成りハ
あはれなり付がり切
は早免ふ山は供ては
るは物事中心ハ必
し後をさすは成り
さし上はゆは下は
何時もは供てはな

うらみあはれど、
くうはうたさうちれど、
は清はうとのさすい
けはのえうさすは
さあしんあさうち
くれす、ささると
ささうつらひさす
ささうつらひさす
たさうちあさうち
いさうこのさす

かまも木子さかすは
青紅あしはくは
くはさすなり程又
あはれも麻もつ
柱あさすは、大
内、あはれもつ

○同也

はさすなりはさす
はさすなりはさす
はさすなりはさす

あはれも木子さかすは
ささうちあさうち
いさうこのさす

○同也

はさすなりはさす
はさすなりはさす
はさすなりはさす

と長くも辱まなむる有
 家内共百連字を預へ
 我共の不服も付ま
 榮せお入る付ま
 何る方かを存たし
 扱保くは考らるる
 此も大考もな
 速取日におそ
 法後引了るる
 承らるる付ま

まめて。おの七
 りぬのまこ
 うれい
 うらん。や
 ーを。控
 今もさ
 けんとい
 きだちて
 ぐくなく
 ーれさ
 ーれさ

天雨天、お成りり
 又、法業内

○筆を絶つ文

法存宗の
 と成り
 付言中
 法後入
 此中
 承らるる

たすもすえは

○筆を絶つ文

こ
 くら
 法心
 了
 名
 び
 持

中唱七言の教も入不
申萩梅子の如優美
七言のいそ根本美玉
深山幽溪の権せ居る
新ぼく思ふをよむ
自然詩意をよむ
只今もなむ去るよ
信不念中長久美
中へ咲けり風情を
と及ぶを思ふ美人簾

あつらひくもれもいづか
きうももぐなれも。深
ぼくもれも。いづか
のこも。て。我も。く。ま
さ。く。ゆ。え。は。も。れ。も。
し。ん。ご。う。の。も。ら。ま。ら
に。ぶ。く。も。ま。も。ま。の。こ
む。き。は。た。の。ま。ま。ま。ま
し。も。い。ま。か。ま。ま。ま
む。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま

を春曉月の中
かきかき短く
及又必極、ふれを
茶を去り枝をせ
年をいぢるを必
あや存るを必
年をいぢるを必
中へ咲けり風情を

あれめでたくと
うよまてぬま
くまのいづか
むれもいづか
うもいづか
れもいづか
むれもいづか
うもいづか
れもいづか
むれもいづか
うもいづか

返に向きし杉桶除法
 野菜と方入り山辺
 き年ハ村人々を
 津中ハ草指首
 同伴ハ醫師法
 中ハ法菴家借月
 体息は不存外ハ
 右陣ハ梅圓局ハ
 左陣ハ梅圓局ハ
 流ハ徒ワハ

あづいごぎしん
 けいよいぎれ
 ちよちなん
 しんじれ
 ろんね
 むちて
 らん
 はん
 られて

頻ハ心費記は有孫
 衣ハ
 存ハ
 新ハ短足ハ
 十球中ハ
 婦人ハ
 海有
 下
 貴ハ

ぼくも
 算
 う
 け
 や
 雨
 れ
 任
 う
 ち
 ち

一、三

縁を極むるにせむは縁
活せぬ昔の存を成
はたけれは世にあり
俄に下は厚き縁を
存せぬは縁を新
膏をよは縁を極む
もも縁中徘徊する
皮をぬき存せぬは
五節の縁をよは縁
手は厚くは縁を由縁

アとも縁を極むるも縁を極むる
がも縁を極むるも縁を極むる
かたも縁を極むるも縁を極むる
はらも縁を極むるも縁を極むる
まも縁を極むるも縁を極むる
した。縁を極むるも縁を極むる
のひも縁を極むるも縁を極むる
内も縁を極むるも縁を極むる
やも縁を極むるも縁を極むる
一も縁を極むるも縁を極むる

縁を極むるも縁を極むる
活せぬ昔の存を成
はたけれは世にあり
俄に下は厚き縁を
存せぬは縁を新
膏をよは縁を極む
もも縁中徘徊する
皮をぬき存せぬは
五節の縁をよは縁
手は厚くは縁を由縁

いとうも縁を極むるも縁を極むる
うも縁を極むるも縁を極むる
ぶも縁を極むるも縁を極むる
はも縁を極むるも縁を極むる
がも縁を極むるも縁を極むる
てはも縁を極むるも縁を極むる
かも縁を極むるも縁を極むる
うも縁を極むるも縁を極むる
さも縁を極むるも縁を極むる
も縁を極むるも縁を極むる

春の行状

○雅言用文章

Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side.

そゆへにわが心もさかたにさかたに
もよほしうらなひもさかたにさかたに
おんおんおんおんおんおんおんおん
了びとてぞゆきなまふ。月影のはつげ
と承りしものさかたにさかたに
はて。春のおちけあさくれさかたに。おん
のおちけあさくれさかたにさかたに。おん
よせやとおんおんおんおんおんおんおん
たしうらなひもさかたにさかたに。おん
さかたにさかたにさかたにさかたに。おん

○昔又よ人を招く文

昨夜くれりて又と我を
召あたまを招く文
ふくは約束ハ見世付は
なしく何事思ふまじ
友は途中ハは若方
を召くはせあふ自由
る召くはせあふ自由

○昔又よ人を招く文

さかたにの君ははるるさかたにさかたに
く又さかたにさかたにさかたに。おん
へわよゆきさかたにさかたに。おん
を召たたまきさかたにさかたに。おん
はさかたにさかたにさかたにさかたに。おん
おんおんおんおんおんおんおんおん
のさかたにさかたにさかたにさかたに。おん
おんおんおんおんおんおんおんおん
おんおんおんおんおんおんおんおん
おんおんおんおんおんおんおんおん

○雅言用文章

下二十五

しきりては、
味は物ホト有る、
菓ハ園申く物付一秋
お位な身、
は、
作、
何事は、
車付く、

○何事は、

右尋、

か、
ふ、
う、
の、
か、
その、
う、
か、
ま、

○何事あら、

ま、

區、

ホ、
ハ、
く、
お、
尤、
不、
な、
秋、
し、

の、

の、
づ、
れ、
る、
さ、
人、
一、
ん、
ま、
ま、

依りて見ればなほ其
 互を甲しとあり
 心の中をなほせよ方
 ても好むと母もこれお
 せ教へて候ふ有るは
 ほか冬の方と烈風を
 ホにかへんやと母の
 せの中へきつこは老
 心も教へたり事と
 正月は古芳ふ中候座

せくくくく秋のつとく
 ちかやうふ去秋を
 れど。夏と冬を
 のひのひと
 のまゆゆの川系
 けおふられど。ぐ
 何のまにけつ物
 おふれれど。ぐ
 付られ。素秋のさ
 けつに。

依りて考はるは皆
 夏の方にはなほ一
 物を以ては侍りて
 存するも上炎暑致
 等と愁もなほ不巨
 果みぬは自然保
 昔共お成候はる
 通候芳ねの中は
 后は何とありて
 はあはれはやくに成下

可きならんさ
 ちうとてちやさ
 公もささくけ
 ちとけ反よふ
 けをうとやけ
 けが故を大の
 もあつめて。大
 へんを心のほ
 せむら。まきの
 けつに。

ふんねがく白

らんねがくをはんきよなりて。はうつま
となかぬや。うーと

○同きや

○同きや

好むははなまをサ耳
陣は西白は話向威
伏座は返右身
特務方く。它は路く私
見負。又公備。と。和
中。あ。夫。付。極。上
ら。も。さ。ふ。あ。あ。あ。

おのの。おのの。おのの。おのの。おのの。
さ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
さ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
さ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
さ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
さ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

と入るはたろはあは

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

はねんろ成及冬後芳

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

は備さあ何て有て哉

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

世将去秋も同極く後々

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

なるく重梅も浮舟

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

流り後ではたは古

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

歌も後有て返る向に

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

はと御念をとお茶白作

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

得る又御念をとお茶白作

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

と物後替りはる別

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

明ぬく親を推り手申、
伏し昔く街をたふり登
り者くく家並直交を
渡り候様種部と必
費具おも麻相付と云
子介遊女按摩手ホを相
依り何一ふ自由と云
存なくは世を口能
人情と云は已と物交面白
付懸あふ付ふ存出候

しうなてなふくさかどとア。どめかき
女どもをさくさくしてよぞ一むるに。袖を以
うれて着きバヤがてまらうどわいひをて。
らひ一志あさうつがくゆもさうたも乃
まどがきくくうてててて出てはうま
うん。おほちうさくくくさあうれよ。家
人よわくよなまきくくうびつれをばう
一よづもも付ち。はうさうわうはあま
くとりや一ひふどもはううひてなふよ
ろづあうれくとなう。足さうくくく物め。

七云く時更黄昏ホ去地
く人路く帰もく体を見
文ははれ地往なり物
はなはれ候候はまよと
下は世去さくくくく先
きゆ。格のたは庭得申
と交交付一筆身と
やんて候候

あふのくくくく付まはるはきけくは。
だうれくくくくれのむくくくく。
まはらふくくくくくくくくくくく。
れくくくくくくくくくくくくくくく。
又くくくくくくくくくくくくくくく。
ぞう。くくくくくくくくくくくくくく。
うれれ付ぞ格さうさき。はるれくありひ
おをなふく。はくくくくくくくくくくく。
足のをおくくく。くくくくくくくくくく。
くくくくくくくくくくくくくくくくく。

○川さうさうお文

昨夜も夕さうさうと川に
川に流れお舟を載せ
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に

○川さうさうお文

お舟にのりてふん。お舟にのりて
よきのゆふさうさうと川に
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に

付法同る孫さやるを
一孫く飲月さぬを
くも兼お舟を載せ
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に
お舟を載せお舟に

○抱瘵見舞の文

お舟にのりてふん。お舟にのりて

○抱瘵見舞の文

お舟にのりてふん。お舟にのりて

不唯東の東内力水相
得や。百之之神柳の
學之法傳言系と筆を
得る加中叔とは五銀
扱は瘧疾とや命は命
半名は序執か。日割
之。中は瘦と。の。白く
在るや。一鏡海の。名。是
ふ。言。と。不。意。致。は。輕。瘧。
侍の在。と。西。海。の。海。東。に

よ。と。ち。あ。の。な。う。れ。け。り。は。な。れ。た。ら。ん。
法。枕。を。な。よ。と。何。う。な。ゆ。り。で。な。さ。か。か。り。く
し。う。も。て。つ。つ。を。し。ま。う。つ。ん。は。こ。た。ち
く。う。さ。わ。ん。し。の。や。し。う。て。け。ん。さ
た。や。の。夫。れ。を。の。き。の。は。お。や。い。ま。い。う。
お。を。け。ん。つ。ー。も。さ。あ。ち。う。り。さ。や。う
た。う。し。き。き。な。ん。ぐ。あ。あ。の。な。い。う。や。い
え。う。の。そ。ん。と。び。う。む。さ。あ。ん。う。ち。や。い。あ。せ
く。し。と。ご。う。な。る。お。や。よ。ん。お。ち。き。を。
れ。さ。う。ひ。さ。う。か。ろ。う。う。に。物。な。る。る。れ

は。後。を。ま。を。け。り。は。あ。ん。は
大。き。と。ま。の。ま。い。む。も。ま。え
小。之。の。ま。い。む。の。ま。い。む。の。ま
何。事。は。神。の。ま。い。む。の。ま。い。む。
は。あ。ち。と。ま。い。む。の。ま。い。む。の。ま
り。や。接。ま。ま。を。ま。い。む。の。ま
ま。ち。何。事。は。ま。い。む。の。ま
何。事。は。ま。い。む。の。ま。い。む。の。ま
也。也。

○醫問師を合れ支

人。の。い。う。ぐ。え。い。れ。と。お。い。う。え。ぎ。う。ん
と。と。ま。う。と。う。ら。う。は。ま。う。て。お。や。と。お。え
ま。う。お。や。と。う。ら。う。の。い。ま。い。む。の。ま。い。む。の。ま
く。は。お。や。と。う。ら。う。の。い。ま。い。む。の。ま。い。む。の。ま
い。ま。い。む。の。ま。い。む。の。ま。い。む。の。ま。い。む。の。ま
し。き。う。な。ま。う。や。け。え。の。う。う。け。い。う。ま
さ。う。と。これ。ち。い。と。あ。や。う。れ。ど。う。の。の。人
人。と。た。ま。う。と。う。ま。い。む。の。ま。い。む。の。ま

○醫問師を合の支

小童入魂、侍方、一人、
 幼はな、不き、梓幼稚
 之、初、早、也、侍、は、は、な、
 百、列、一、て、家、中、を、は、は、な、
 其、中、に、宗、高、女、が、ふ、家、甚、
 痛、は、違、上、強、打、く、氣、後、
 仕、替、仕、之、肉、殺、疲、勞、仕、
 之、百、父、母、之、愁、歎、絶、也、
 其、は、な、く、不、及、之、志、強、決、
 之、後、は、な、く、之、中、に、ふ、

何、が、一、が、り、り、が、り、り、が、り、り、
 ち、も、も、も、も、も、も、も、も、
 て、う、も、も、も、も、も、も、も、
 た、ご、ご、か、い、づ、ち、ご、ご、
 つ、い、ち、ち、ご、ご、ご、ご、ご、
 だ、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 の、お、お、い、む、む、む、む、
 こ、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、
 を、ち、ち、母、を、心、を、心、を、
 ぐ、い、は、水、ご、ご、ご、ご、ご、

と、家、折、る、お、石、を、
 其、中、に、宗、高、女、が、
 痛、は、違、上、強、打、く、
 仕、替、仕、之、肉、殺、疲、
 之、百、父、母、之、愁、歎、
 其、は、な、く、不、及、之、
 之、後、は、な、く、之、中、に、
 何、が、一、が、り、り、が、り、
 ち、も、も、も、も、も、も、
 て、う、も、も、も、も、も、
 た、ご、ご、か、い、づ、ち、
 つ、い、ち、ち、ご、ご、ご、
 だ、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 の、お、お、い、む、む、む、
 こ、ち、ち、ち、ち、ち、ち、
 を、ち、ち、母、を、心、を、
 ぐ、い、は、水、ご、ご、ご、

何、が、一、が、り、り、が、り、
 も、け、い、わ、い、た、う、ん、
 る、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 を、お、も、い、く、ご、ご、
 た、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 れ、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 ど、い、て、ら、あ、い、ご、ご、
 り、ゆ、れ、ご、ご、ご、ご、
 は、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 わ、ご、ご、ご、ご、ご、ご、

ぬく糸を侍か海は仕我
 儀七給出来玄園今作
 依白法汁云々有是法
 居るは世小生彼家五生
 以是外は用とむる振
 文同ふは尋と下儀を
 おけり百愛がたけも存
 居るは身は体と振
 昔は後付は器業を
 法系に載仕く振と相成

ともはたつたをわとこのやうはた
 せと。何ぐかこうくわんを
 ぶねおとて。おとねひとまを
 ドや。ささぎのくわくた
 して。あつとゆえ。やうとせけ
 てたつをせはあはんとたん
 ます。けてせんせいの茶とけ
 うち。もの仏と。おひけえめ。
 う思うたまふれ。何ぐかぶ
 名とおが。て何がとをの。はね

以り海に本懐と至社
 有は今も有るに存付
 依小生法は情茶に成下
 何事せよ。はたせは
 来と成下。友倫も成作
 上儀はら

○火事入る舞の文

ぬくは舞と成り
 有は来り形振る丸
 上儀火事強く

ここのきりなまのや。あれうと

○火事入る舞の文

ぬくは舞と成り
 有は来り形振る丸
 上儀火事強く

頻、はあそしつらふ先く	たやわらわら	う。やどろしづらわらるは
はあそ条云く平遠路欠	娘ーさよ。びくびきたまうかひのねを	る
及く五郎中くは後を	きたまうおどろしよしむばさんたのめを	せ
有く志直く承知なるる	わかしきささしりうらひあうおくれて	き
召侍く老れ日なを後近	くやうたうせささるべしほつてを侍	し
引まは百々今も後く	げさともむ。ばーん。ト。きとらなもれき。人	ん
まを、扱は賛出一系意	人またまうとてたう人。のめささる形も	さ
メるあははるるはは	つらけし人。きよかづらむらこのあーび	び
入く向くく積ぬるん	ざうらおそ後し。むくつんよきけ	ー
海、火災程と物なき	う。大あやうの。ささおこつたう	う

作来四くも後き、はなふ	ゆへけらぬ。つらよ。はれがさよ。たやわら
般道災害考及才もき物	めやけし人。ま月つてあさ。きーきたま
くをわく於の初は久舞	うらびう。みづ。はようくびす。こ
まのまは歌りう。む	まきささる。さかーと
○水見舞の文	○あそ舞の文
はつて、も舞おほきかき	し。し。はささ。れを。ま。い。う。ち。せ。と。う。つ
あ、付らまけぬの舞計	す。て。う。う。く。と。ら。さ。ぐ。ら。や。う。う。ら
る人口中言ひか果つる	も。ま。く。く。づ。や。よ。ま。か。れ。さ。い。の。あ。つ。れ
水殺あす、はなくさ	も。け。ら。か。れ。川。よ。ま。か。く。は。信。い。は。ま
え。は。は。後。も。に。舞。は。は	げ。し。ま。い。し。て。後。あ。や。う。ら。な。う。よ。さ

は利心ありし故に怪我ホ
と有る可成るを以て其は
ともく橋は切水押
入るはははははは入
は粟一中は後ほたれは特
又法弁戸不は五半五
はは利心は困るはは
ふは教毎言一瘦有運
中く者禁ホく後ほは老
其は了ら付くは又は不

とほくきぢれどホーセウ
人うーろの橋もなづれて。堤を水の
崩しなるれど人のつづきすもくもど
るきれた。れどぢが。はは井のら
アア人又ハれよアアト。たのよと
なん。どよねとちもつれもくよは
せはる。うーものぢれども。はは
よのよよいつらきも。はは。はは。はは
がい。うん。うさ。はは。はは。はは。はは
う。はは。はは。はは。はは。はは。はは。はは

自中く後とらををり
は才分潤を了はら女子
大さくお年同く習
はは思くををくはは
交し付れハ大小川益
光ははら中ハ一村象
其は皆長押流は坊ホ
も有く流帯代は後を
なく子ハハ

○金子借用の文

あへけをたふや。こびのれぢ。だれぢ
小さま川にありつれれ。はは。はは。はは
ことうや一きと。はは。はは。はは。はは
これどせら。はは。はは。はは。はは。はは
な。はは。はは。はは。はは。はは。はは。はは
う。はは。はは。はは。はは。はは。はは。はは

○金子借用此文

偏若くある務ふは終た
 法に沙法は其孫の法
 法に成り代はるるは存
 するまに何村の法を
 其令行両多きとて
 其の法に代はるるは
 其の法に代はるるは
 其の法に代はるるは
 其の法に代はるるは

ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま

かく中依り候ふは
 新中法は心法
 一と引高七田地
 中と引高七田地
 依りて新法は心
 百法五丸とて
 其令行両多きとて

ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま
 ちれりていひのりま

法は文と通れぬ事なり

○同借用律文

之く... 孫法核姫友法右務は某
思は根子及承お大等
なるく此も金子に依る
位下及承先其後仁の既
知事も有る事の上事
不根法に依り付あ有
根法は百を合する依

○同借用律文

しき... ことほて... かく... ふう... ぢ... こそは... いか... う...
しき... ことほて... かく... ふう... ぢ... こそは... いか... う...
しき... ことほて... かく... ふう... ぢ... こそは... いか... う...

法は文と通れぬ事なり

よて此をなぐ以上

借用中金子こり

一合何支 但五月三月何程
利銀も有る
大まけ交あ村百姓は年貢
と... 及... 及...
お新借中不実い也
石海に依り高秋収納お
海法才不速も納て受
其書中も依り

このひもかき

一こがね... 但一... 二月... 一...
くぐの... せ... せん
これ... の... へ... も...
... して... ぎ... け... せ...
う... た... せ... なる...
... じん... や... かく... ま...
... の... に... せ... け... せ...
が... 田... ころ... ま... ち... け... づ... づ...

引紙讓沙文と通私本
持し田代幾町は引
て下く柳を序に後中
出り老を法をく程又手
つと後有る言をか書
老か多ふ交はして受
力ほ日かお沙文仍又件

○お母子振舞の文

清家と老人振舞お
迫後を不便に思ふ也

○お母子振舞の文

となりおおされをよびてくたび
ともらなれまごよまをわれよるをほく

可くくうをさめたまふもかうき
ゆえにきくものを付くか志程す
何んを言にきつこのゆえんとそれ
おあごおごてくくしておのあご
よごのくくおれとゆえにをさく

百も後有るお母子
仕法を以てお教へて下る
は元位に信合と下りおは
恵む程幸謝の詞も書
て書る老人の儀は
く程有独居後及作
儀はたか馬車月幾日
と書お記に掛書法
合ふ下りお教へて
中めり百何法は仕

おぼくはなれびく人くもさくくうの
もーのいさしてけいばくはさくく
じまごいさくめいさくくくくく
くくくくくくくくくくくくく
んくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くれ。おたさくくくくくくく
んくくくくくくくくくくく
おはくくくくくくくくくく
のくくくくくくくくくくく

こ過生子ぬは物は集ま
ふ下交まをくま手杖
こまこ入は麻抹こ酒
青馬ようちのこよ

○青楼女まの文

はくはまは物まは
はくよまは向は物ま
よまま利は物まは
はくは物まは物ま

けこまゆはくまはか
のまにこまをまは
まはくまはくまは
うまはくまはくま
まはくまはくま

○青楼女まの文

はくまはくまは
まはくまはくま
まはくまはくま
まはくまはくま
まはくまはくま

狂如ゆまはくまは
たこ母は物まは
はくまは物まは
まはくまは物ま
はくまは物まは
はくまは物まは
まはくまは物ま
まはくまは物ま

まはくまはくま
まはくまはくま
まはくまはくま
まはくまはくま
まはくまはくま
まはくまはくま
まはくまはくま
まはくまはくま

早く案内ふははるい大を
 ぬふ塞りてふ成も計
 且又法眼負く羽故幫
 百おとまふとらて子面白
 律又さくは付中たは使
 法入部は後法は作り
 ちや斗は狼羊とと羅往
 いたく過は法をくはり
 候は法在法は法をく
 法は法は法は法は法は

くははるい大を
 ぬふ塞りてふ成も計
 且又法眼負く羽故幫
 百おとまふとらて子面白
 律又さくは付中たは使
 法入部は後法は作り
 ちや斗は狼羊とと羅往
 いたく過は法をくはり
 候は法在法は法をく
 法は法は法は法は法は

素ははるい大を

○喧嘩核移り文

ふさくはは痛をとりぬ
 何の在は法は法をく
 候は法は法は法をく
 後とて法は法は法をく
 去律は思ふもふら為後文
 へ候は法は法は法をく
 他人の存止は後

○喧嘩核移り文

たどろふは法は法をく
 候は法は法は法をく
 候は法は法は法をく
 候は法は法は法をく
 候は法は法は法をく
 候は法は法は法をく
 候は法は法は法をく
 候は法は法は法をく
 候は法は法は法をく
 候は法は法は法をく
 候は法は法は法をく

怪は法自身を授けりては
 空念とも思ふる事深敷
 当年を女とて法尼まき付
 其うは厄松とて思ふる様
 有るは極は強動に付只
 法中かとも尋ねたは法尼
 其法は之と下法了等と云
 下百巻外始末委實承り
 以下に腕之をり老せし
 其毎に三回入お連を律

一々ももさういつはまのなまきまはあん
 もようり下がくくたるいひまひまようたなま
 いかうにこそちあふれはておがーはごもて
 げんご海きののーやねだてらうらうらうら
 いるよりや。なまきをくまかよゆたうたれ
 だかのおむくつたものぞれきいつせこたわろ
 下わかあてまきて。だのましけはいおほして
 人をたあめあどもはなるがよばんこくに
 砕れて。みあてはまのそごらうらう。お
 一うおまはくまわらうがうて。ゆまひはま

を授けりて後ち有る也就
 不咄書ハ律又大解法
 大兵の文目言法菩薩
 お師は當りより夢噴吐
 さは是れは法尼の母法
 一人のなるあつて歩負途
 其れが伴を及苦あ見
 物と笑きまゝお師は風
 彼はれ將又彼若きもや
 手紙とて負り申はれば

ぞぎ一ろいじふたふんあわらる。せんが
 いともれおんまにいつこまひあやうや
 いふもはらふとてふうらうらうらうて
 あきまへん人しんかならうらうと。ん
 ころころはものごうらうたなん。うまは
 ころころぐぐぐれうらうらひわうれあど。ぱ
 たよあひつても。あのうらうらうらうらうら
 してん。まをほくく。これいこうらうらう人
 ころころらうらうらうて。はてせんはくたふん付
 ん。くぐぐ。のまらうらうらうらうらうらうら。

法づくは共改く非ふ相
毎いとせ何事紐使お味
根法接授い後随いね
根中の付は随中い後内
度いお科業料お中いふ
及講文一橋口いなる
い後流文お通いけい愈味
い後紅いなるい思ふい言
て方いけい一店在国程す
と事いて何は若法老い

て下りいこい
○芝居見物の文
目いこい再雨晴れお人いふ
中物林表お扱はは日お
何法い骨い骨い骨い雨天
と人い骨角芝居い業物
はは依い芝居見物有付
い百法因るい皮なるい高
時大坂下り有名い役者い
もたい天神記い官原傳授

○芝居見物の文
おして女おとかがはほほ
かまはりいよびいりい
おはいいよゆといい
かりめれおれすかかりていなるおやいおなり
い乳おはのわがをまきおれががらづお下り
おどいいておいけいおめいおゆおすた
おのおいおにおにおいていづいお下りおは
て下りおいていづいおはりおめいおまきおれおはりい

し拍を付し外は拍置置
大入の由や唱はれ一ふも
又物な反りも付り侮居し
極まるる心去拍歩はる
言法をり百は後しれと
本又なるる世何は後を
り田承はるも倍後承と
業お混る付りは物
そ介持し後もおられ
付りり拍はるる田承

一いといはてはやしきだきなどいふ
おむと飛入いふもむだたはせしん
かめりやばざれいふもいふもいふも
ふれつぎふゆんきんさげんぐとけ
がくとよをたがらふ入まどせも
いふもいふもいふもいふもいふも
ぎのちふゆりれるきおむだはゆ
おむと付しんむりし拍子かられ
後あり月くはなごいんり
ふいといふもいふもいふもいふも

し月録は拍子有る
と録はるる方り刀玉
月能くおとしし不玉又
海はるる歌しし軽
業はるるるるるる
ははるるるるるる
言はるるるるるる
ふ思はるるるるるる
○角力具物の文
しるるるるるるるる

○角力具物の文
くうのていふのうかきるるるる
おぼしきはるるるるるる
めしゆえはるるるるるる
又いふでたきるる

同也高ふ中降り氣ま
 車存く百は一件ハヤ
 けな海ふ家物海が
 面同直原ふ極難感
 色色以昔旁大衆生
 れ故火締色列々指菊
 一色と車存付中道
 夕乾極赤文書中作
 中極列の云右と手放
 種及の舟有種の方質

一々れぞい一々れぞ
 はまがた人よもさ
 たりとち草うんい
 まど。うもつれま
 れるかんさうんさ
 ひれもほつたやほ
 もく一色はうかた
 ちもくも付して。か
 きんたをれも。ふ
 けゆえて。うねた
 一々れぞい一々れぞ
 はまがた人よもさ
 たりとち草うんい
 まど。うもつれま
 れるかんさうんさ
 ひれもほつたやほ
 もく一色はうかた
 ちもくも付して。か
 きんたをれも。ふ
 けゆえて。うねた

入及美向く難返る友
 村入とわ村一尺は
 画と教とたふて我
 ちく何卒生はは澄
 上は預リと下回
 台共何とせし不
 子負教もは書後
 存く一
 ○奉公人清状

一々れぞい一々れぞ
 はまがた人よもさ
 たりとち草うんい
 まど。うもつれま
 れるかんさうんさ
 ひれもほつたやほ
 もく一色はうかた
 ちもくも付して。か
 きんたをれも。ふ
 けゆえて。うねた

○奉公人清状

久とは何ふやと云ふ佛と

○奉公人清状

口はくしれりては後を

此日御法機程支ふ分が
そと扱出し法巻の文遣く
法束務し法儀を事なげ
利あハ彼若者法事と
言は法状はたは法合
為法以上は法入
ね又料と若者法儀として法
と法、未成下平の指はり
曲は法厚事取の上
法状

~~~~~  
ぐやあそ〜とあ〜とあ〜。あれさ〜  
わ〜とどけ〜とせ〜とあ〜とあ〜。れ  
んもな〜とあ〜とあ〜。あ〜とあ〜とあ〜と  
あ〜とあ〜とあ〜。これはあ〜とあ〜とあ〜  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜

私乃、居たに其の中若法  
念裁は法事、具上、下年  
法給室の程々おとしの負教  
く内よ及びな何程法儀に  
其下性、文事、亦事、  
法庭は其代、何其も檀  
那、法制、其、宗、有、亦、  
七次、又、法、庭、法、束、は、柄  
為、不、事、ら、信、り、何、付、其、  
人、想、り、こ、る、と、り、又、ハ、法、状、

くばくとあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜と  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜と  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜と  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜と  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜と  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜と  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜と  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜と  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜と  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜と  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜と  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜と  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜と

御言用文章

二四一六



あまのついでに信長は後  
累次舟にて往方一丸速矢  
落し仕井私に流物も流  
損は心配にやあまのついで  
たの目流物七件一

らうとも。何ぐーかてはうしんせん  
づうそーまじりーとやうのまぼろし  
うらひかゝさるるにふん

雑言用文章 下巻終

あまのついでに信長は後  
累次舟にて往方一丸速矢  
落し仕井私に流物も流  
損は心配にやあまのついで  
たの目流物七件一

がっ津庄の大人きわむゆめのま  
もあつくあひてしりしきみやひら  
きよひちるといれくあかちり  
—あ—たましくいれよよちう  
そことらうらのいさうも—らぬ  
人とりともそきみあそうれは  
月夜し—く—は—り—る—ん  
しゆ—ん—た—か—い—れ—る—た—れ—を

ま—ち—よ—る—月—の—た—ら—の—ま—と—き  
—き—あ—い—か—ら—る—の—み  
ひめ—あ—る—し—よ—け—ら—ね—を—揺—れ—ぬ—  
—し—ら—う—ひ—と—あ—ら—ま—の—ほ—せ—あ—る—  
あ—れ—か—ら—さ—く—あ—ら—ま—の—し—ら—う—  
—と—あ—ら—ま—の—し—ら—う—の—し—ら—う—  
あ—の—ま—ら—ひ—ひ—る—と—あ—ら—ま—  
—と—あ—ら—ま—の—し—ら—う—  
—と—あ—ら—ま—の—し—ら—う—

けいさきさうりふいせいのしんま  
 やるはつをさうめいしんまの  
 まてしんまめくゆまふしんまに  
 ひろくまのしんまえつしんま  
 とれはなうわいふよんしんま  
 としんまのしんまふしんま  
 あしんまのしんまのしんま  
 ちんまふしんま

律居黒澤翁滿大人著述書籍目錄

古今集大全

顯注蜜勘を始として餘枚打聞遠鏡等其外諸先達の説ど  
 もを其要を括して漏さば出し自の説とも加へて僅四卷  
 小注くまやかにせらまじる古今註釋大成外書外記

言靈の志るべ

此書を上中下三卷として上巻小を詞の活らきや辞の結  
 ひとかふはるひの三つをいとく早道は知らるる法則を  
 立て初學の爲せし中巻に辭の數凡そ四百餘ありるを  
 盡くらぎて一つに其義を解りかし下巻小を悉曇韻鏡  
 と別て皇国の五十音の外国はまされる妙用を弁へられ  
 べきを音韻言辭の學において此書に備らばと云まふ

源氏百人一首

○言靈の志るべ

○書目一

源氏物語中の人物ある限を出して一人小歌一首つと  
らむをたのづらうら一部の趣の志らるやうに標註を加へ  
べき書あり

獨學綱

歌々云物いまと曾て知ぬ人の早道ふとと習ふべき学び  
めしを記して見るべき書物を煩々奥儀小至るまで道  
引て風体の事と論じ惣て法則は傳らざるやうせ一代  
集よ百千餘首の活氣ある歌どもを抄出して註解を加へ  
證さきたる書あり

道行振

こそ古書どもに見えしる免づらしきふとと見るに志  
しむひて書とめおられたる隨筆あり

消息案文

消息案文

上巻は俗事をとせうそこふに書べき案文とほぎ又其  
文言につかふべき雅言どもと部かして多く出し今の俗  
語ふあて見安きやうに注解を加へ下巻も古き日記  
物語ふ出する昔れ消息ぶとある限抄出して俗文の手  
紙と翻譯、雅俗二章つと並べらむとせよ消息文書習  
ふに必用の書あり

北勢古志

伊勢国風土記の殘篇を根て桑名負并朝明の三郡に  
内和名抄の郷名神名帳の神社等其外古きあともと今  
おありかした引合せて委し細り小正されしる書あり

作文要書

世は井川の序土佐日記あど和文の根元のやうにい  
へども誠の和文を太古の祝詞宣命の類小て中項漢文の  
為にこそを書事しよ又後よいを源氏の物語あどの項  
くあ清古へ復したる物のしと細り小てかか書  
の漢文や誠の和文を並べ論ざらきたれど古文章と学

ぶにも中古体を書習ふたと座右に置いて便ある書なり

神道學則

神道を皇國の大道にして並に神道者と云て鈴ふるもの  
の類よりあらば公の御政より下万民の庶民に事と物  
物神道よりあらざるをふき事と古書小證し身の教を成べ  
くをたらきたるあり

雅言用文章

此書を年始暑寒五節の中元歳暮の贈答と始て冠婚葬祭  
の類其外病氣見舞喧嘩の挨拶道具質入金銀借貸奉公人  
請状小至るまで日用の俗文と雅文と翻譯して雅俗  
つゝ見合の爲にいと多く出したまきど和文といふ物軒  
も去らざる人にて是を手本とせられどいりぬる俗用を  
と雅言に書得らるる書なり

浪花職人歌合

此書を左右に方と分ちて一番くは左右此方人どち互小歌の非  
難と論じしひ判者其勝を定るとりしきねむき有書なり

